

## 日本の歴史 26

## 『開国前夜：田沼時代の輝き』

鈴木由紀子著（新潮新書 新潮社 2010）

本書の請求記号 210.55||Suz

稲垣 宏行

田沼意次が老中であった江戸時代の十八世紀後半には政治や学問、文化などの分野から多くの先駆者が登場しました。彼は重商主義政策の視点から、日本の経済や貿易面において開放的な政策を推進しました。蘭学を奨励し、平賀源内、杉田玄白ら優れた蘭学者を保護しました。また、開明的な大名や幕臣たちとも交流を持ち、改革の志を共有しました。

作家である著者は、学生の頃、源内に興味を持ったことから、田沼時代に活躍した人々に強い関心を示していました。また著者は、この時代を「幕末の開国思想へとつながっていく経済や文化の豊饒期」と評価しています。本書では意次を含め、田沼時代に活躍した人々の生き様を紹介しています。

平賀源内はエレキテルなど多くの発明を生み出した一方、『ねなんしきよ根南志具佐』など多くの創作本を著し、戯作家としても定評がありました。杉田玄白はオランダの『解体新書』を翻訳し、当時の解剖学の常識をしげひで一変させました。蘭癖大名の一人であった島津重豪も、伝統的で閉鎖的な気風を持つ自藩の改革のために、他藩の人々の入国や居住を自由化し、商業を奨励するなど開放的な政策を打ち出しました。娘の茂姫を一橋家に嫁がせたことなどから、田沼家とも浅からぬ交流があったようです。また、この時代には最上徳内のように蝦夷地（北海道）の開拓に取り組む人物も田沼意次の庇護を受けていました。

思想面においても開明的な人物が存在しました。開国論を唱える『あかえ そふうせつこう赤蝦夷風説考』の著者工藤平助の娘で女流文学者であった只野真葛です。開明的な父の気質を受け継ぐ彼女は、長じて勝負の論理、種の生存競争の論理といった考えを掲げていました。身分の低い者でも実力次第で立身出世ができるという趣旨も含んでいたため、身分制度に象徴される儒学の封建的思想と真っ向から対立するものです。それが如実に表れているのが、自著『ひとりかんがえ独考』です。ここで

述べた思想は、後の開国や富国政策の思想へと繋がっていきます。

しかし、彼らの一生は華々しいばかりではありませんでした。蘭学に精通した平賀源内ですら実際の暮らしは貧しく、戯作本の制作で糊口を凌ぐ生活を送っていました。杉田玄白にしても、漢方を生業とする医師が多かった時代ゆえに、『解体新書』の出版直後はかなり批判を受けたと言われていています。最上徳内ら蝦夷地の開拓に携わった人たちも、長い年月と労苦が報われず、意次の失脚によって道半ばで頓挫するという憂き目も体験しました。只野真葛も、同じく文筆家であった曲亭（滝沢）馬琴と交流があり、師弟関係まで結びましたが、馬琴が封建的な思想の持ち主であったため、両者の関係は決裂してしまいました。

新しいものを生み出すことは難しく、それが多くの人々に受け入れられることは、さらに難しいことです。意次が行った改革の挫折は、天災による政情不安や経済の発展に伴って貧富の格差が拡大したこと、また、松平定信ら反田沼派の存在が主な要因と考えられています。しかし、当時の庶民にとっては、単に政治への不満だけでなく、旧来の価値観の著しい変化についていけなかった部分もあったのかもしれない。

社会的、また個人的には様々な批判を浴びた意次ですが、彼とその時代に活躍した人々に共通すること、それは先駆者であったがゆえに、同時代の人々に理解されなかったことにあると思います。元々、江戸時代は儒学という封建的思想で成り立っていたことから、この傾向は強いと思います。同時に彼らの時代に生じた変化は、改革を補足した部分を発信した情報が少ないこともあって、現代とは比較にならないほど斬新な改革だったという感想も本書を通じて抱かれます。

いながき ひろゆき(司書・係・情報サービス課)